同窓会だより

23 号
令和 5 年 5 月号

発行責任者:白井　鉄男
発行:八幡中学校同窓会

あなたのご家族（兄弟・姉妹・父母・祖父母）に八中の卒業生がいたら見せて下さい。

変わる社会　ごみ処理・排泄処理　人間が社会生活を送る際に、必ずついて廻るのが生活ごみのと排泄物である。ですから決して今始まったことではありません。

昔、それも縄文時代の以前の石器時代では、人々は狩猟採取生活であり、遊動生活（移動生活）をしていました。ですから一定の場所に居続けないので、ごみを捨てようと排泄をどこにしようと、適当な時期に移動するので、その残骸はいずれ風化してしまいます。となればそんなに気を使う必要はありません。しかし、縄文時代（約１万年位前）に入ると定住生活をするようになります。

定住生活をすると、一か所に居るので、ごみ処理と排泄物処理をしなければ大変なこととなります。ごみは生活で世話になったものであることから、簡単に捨てるものではなく、既になるべく捨てない、何か利用出来ないか、再利用は可能かと、今の産業廃棄物処理の３原則（減らす・再利用・再資源）とほぼ同じ考えを持ち、燃えるごみと燃えないごみの分別をしていたという。

生活ごみは発見された貝塚などでも分かるが、単に貝だけが捨てられていたわけではありません。いわば「台所ごみ」です。また排泄物は川に流したり、一定の場所に埋めた可能性が高いとのこと。

では、江戸時代くらいになるとどうでしょう。江戸時代は「ごみゼロ社会」と云われるほど、理想的な循環社会でした。生活ごみの大多数は再利用されました。紙は集めて再生紙に、金物は溶かして再利用、電灯のない時代のロウソクも溶けたものを集めて再利用。もう一つは修理をして長期利用するなどしていた。どうしてもそれが出来ないものは、埋め立て用に利用された。

排泄物は、近隣の農家に堆肥（下肥）として売買された、よく落語で熊さんや八っあんが登場し、たな賃が払えず大家から催促を受ける話がありますが、どうしてたな賃が払えない住人を大家が、大目に見ていれたかは、住民の排泄物が農家に売れたからとも云われています。

これが、明治に入り西欧文化が入って来ると、徐々に生活ごみとされるものが「使い捨て」の消費社会になることで、ごみの量が増大したり、石油製品の普及で腐敗や風化しない製品が増えた。その結果、その処理に困りポイ捨て・不法投棄が横行したり、自然災害時に大量のごみとなったりと、ごみにまつわる話は後を絶ちません。

また、電化社会での電気の発電源でもある原子力発電所は、今もなお最終処理が埋設しかなく、その存在そのものが、電力重要と供給の狭間でその扱いが取りざたされている。人間が社会生活を営む上で、必ず残材として残るごみと排泄。これはこれから先も必ずついて廻るものだけに、その処理法や利用法・解決策は必須である。

家康ゆかりの地

②五社神社・諏訪神社

徳川家康によって、二代将軍秀忠公誕生の際、生まれた土地を守る神「産土神）として、浜松城内から現在地に遷された。家康公はその後も子供たちの初宮祈願や自身の厄除けに行ったと云われる。

同窓会だより」掲載記事募集

八幡中学校同窓会事務局　　代表　白井　鉄男
連絡先：〒４３０－０９２８
浜松市中区板屋町６１２－４０２
ＦＡＸ：（０５３）４８９－６３９１
ironman29@hotmail.co.jp

「同窓会だより」は、八幡中学ホームページトップの「特色ある活動」から入ると、スマホやパソコンからでも見られます。皆様の友人や同級生にも教えてあげて下さい。「同窓会だより」は毎月発行。